

創立25周年を迎えて

名誉教授 村 山 朔 郎

創立当初3研究部門をもって発足した防災研究所が、今日17の研究部門と13の附属施設を有する大研究所として25周年を迎えることができますことは、誠にご同慶のいたりであります。これは設立に尽力された先生方の遠大な構想と、それを育てられた所長はじめ所員一同の熱意と努力の賜物でありますとともに、この発展を支援していただいた本学内外の関係者各位のお蔭であり、ここに改めて深甚の謝意を表する次第であります。わたくしは昨年までこの研究所とともに歩み、特に20周年の記念行事には所長としてのつとめをさせていただき、顧みまして非常に光栄に思っております。25年の歳月は防災研究所の長い将来に比すればほんの一刻にすぎぬかも知りませんが、それを守る人々からみれば世代交替の時期であり、新しい世代の若い活力による将来の発展に大きい期待を寄せるものであります。

わが国は自然災害が、数の上でも、種類の上でも非常に多い所であります。災害をおこす原因は昔も今も変わりませんが、災害現象の現われ方は発生時の条件や環境が時代とともに移るに応じて変化し、またその対策も重点や社会環境の推移に応じて変えねばならないようになりつつあると思われまふ。現象面では、たとえば新潟地震で注目を浴びた砂の流動化現象はかなり以前から実験室では知られており、またそれまでの地震時にもすでにみられたともいわれています。この現象が新潟で注目の的となったのは、ゆるい砂地の上にたまたま大きい支持力を必要とする高層アパートなどがあって災害を大きくしたことが人目を引くものにしたともいえます。その後発生したアラスカ地震の時に起こった大地すべりの原因も、新潟と同じ砂の流動化現象とされ、この現象の別の珍しい現われ方と思われまふ。また自然災害とはいえないかも知りませんが、列車の火災はトンネル内の走行によって特に加速されるものではないようです。それにたまたま列車が長大トンネルに差しかけたとき炎上にいたり大災害をおこしたことがあります。これらの珍しい災害は、発生の可能性はありながら、災害発生の時と場所が、災害を拡大する条件や環境と一致する確率が今迄非常に小さかったため、ほとんど前例がなかったものでしょう。わが国は国土が狭く、そのため各種の地域にまでも開発が進み、一方大型の構造物や人工の造成地が数多くつくられ、新たな条件や環境が最近非常に増えてまいりました。災害現象の解明や災害の予防・軽減対策の研究に、このようなことを検討に加えられ、大きな災害が一つでも未然に防止できるならば非常に幸なことと思ひます。研究のむつかしさは、このような意味でも深まり、またそれだけ新たな研究の必要性が感ぜられます。

ここに重ねて防災研究所の一層のご発展をお祈りいたします。